

病児保育奮闘記

(13)

子どもサポート H&K
大石 仁美

世代交代はむつかしい

ジイジイはどこへ～

ひさしぶりにやってきた S くん。「ねえ、おばあちゃん、なぜジイジイはこないの？ どうしてなの？」と、神妙な顔で訊いてきます。

「ジイジイはね、年をとって疲れたから、この仕事はお休みして、今は他のお仕事をしているのよ。」

「ふう～ん。なんでかなあ」

「会いたいの？」

「うん、会いたい。」

「じゃ、今日は家にいると思うから、電話してみようね。」

ジイジイと S くんは、なにやら長話。そして満足した様子で電話を切りました。

なんども利用しているうちに、すっかり馴染んで、実のおじいちゃん、おばあちゃんのように思ってくれている子がけっこういて、私たちのほうも、滅多にこない孫よりよく来てくれるこの子達

の方がずっと可愛いと思えるのです。

実をいうとジイジイこと小川ですが、80歳になるのを目前にして、保育の世界から、大好きな歌の世界へシフトしてもらったのです。

創設時からともに働き、喜びも苦労も共にしてきた仲なので、私も悩み、彼の方も思い入れが強いぶん、こころ残りが大きかったのですが、やはり決断が必要でした。

人にあとを譲るときには、淋しさと同時に様々な葛藤が伴います。息子をスタッフに入れた時から、引き際を模索しながらも、想像以上にトラブルが表出し、二人のやり取りを見聞きしながら間に入って調整役をするのも痛みを伴う仕事でした。

老化現象がつぎつぎと

年を重ねるたびに、心身共に若い時と同じようにはいかないもどかしさを感じます。

私個人でいうと、同時進行での複数の仕事が出来なくなりました。なにも難しい仕事ではありません。例えば、台所で煮物をしながら、掃除をす

るとか、料理も、焼き物と、揚げ物や、蒸し物を同時にするとか、単純なことですが、失敗をすることが多くなりました。パソコンなどをいじりだしたらもうダメです。タイマーをかけてベルの音に助けてもらわないと、焦がしてしまい、すべてやりなおし。子ども達の食事も、年齢や病状にあわせて、あるいは嗜好にも合わせて、何品か用意する必要がありますが、焦らず、ひとつひとつ片づけていく方法に切り替えざるを得ませんでした。それで以前より時間がかかるようになりました。食事作りは大事な仕事。これ無しでは、この仕事は立ち行きません。「私がやらねば誰がやる」まあそんな感じで頑張っているのです。

もうひとつ、老化を意識するのは、目の前にあるものが見えなくなったということです。探してもみつからない。でも後で探して、同じ場所から見つかるのですから情けない話です。目が悪くなったわけでも視野が狭くなったからでもなく、脳がそこにあるということを認識しないのです。ああ、こわっ。

さらに物忘れは、まるで水がちょろちょろと排水管に流れるごとく消えていきます。消えないうちにサッとメモを取る。そうしないと前に進みません。

そして悪いことに、やらなければいけないことが面白いくらい頭の中を駆け巡るのに、やろうとすると億劫になるのです。

なんとこれが加齢の成せる業なのか！

子どもたちが可愛いから続けてこられたし、使命感もある。でもしんどいなあと思うことも多々ある昨今です。それでも、舞台から降りることはできない！誰かに助けてほしいと思うことはあっても、誰かに丸投げしてもいいと頭をかすめることがあっても、どこかで、死ぬまで続けねばと思っている私があります。息子が跡を継いだことで逃げられない宿命を背負ってしまったことも一つで

すが、いくら考えても、零細企業にとってこれは私にしか出来ない仕事なのです。さらに、高齢になっても趣味だけで生きるなんて、そんなことは怖くて出来ません。確固たる自分の居場所がここにあるからです。

ジイジイもきっとおなじように思っていたでしょう。

ジイジイが保育の世界を引退する際は、気持ちの整理にかなり時間が必要でした。淋しさが体中から染み出ている、気の毒なくらいでした。

それでもスーッと受け入れていけたのは、もともと素直な人柄だったことと、新しい居場所が見つかったことが大きいと思います。

主に看護と飯炊き婆さんの私と違って、保育は体力仕事。むずかる子を抱っこするのはかなりしんどい仕事です。しかも保育室は二階にあるので、受け入れ時は、狭くて急な階段を抱きかかえて上って行かなければなりません。

おむつ替えも大変な仕事。嫌がる子の、気を上手くそらしながら、きれいに替えてやらなければなりません。ウンチがポトリとオムツから落ちたでは困ります。おしりも綺麗に拭いておかないとかぶれます。「よく見えなかった」では保育士はもう限界です。それでも、そうした部分は若い人にしてもらい、ジイジイには得意なことをしてもらうことでそれなりに上手くまわっておりました。

乳児の手遊びや、幼児と一緒に歌をうたったり、紙芝居を楽しんだり。さすが年季が入っているだけあって、聞き惚れるほどでした。ジイジイも子どもとの触れ合いに、生きがいを感じ、癒されていたと思います。

息子がスタッフに加わって、大いに喜んでいましたが、ジェネレーションギャップはやはり大きく、頭では理解しても、なかなか素直に許容できないことが多く、双方にストレスがたまっていることが傍目にもよくわかるようになりました。

例えば保育に関する考え方の違いです。

息子はただ今子育て真っ最中。家庭では甘いパパさんです。食事の時、なかなか食べようとしないうちに「いいよ、いいよ。好きなだけお食べ。無理に食べなくていいよ」と言うのを聞いて、「さあ、美味しいよ。食べてごらん。というのが本当だろう。なんだ、あの言葉づかいは！」と陰でぶつぶつ。

だっこ！だっこ！と泣きわめく子がいたら、ずっと抱っこして一日いることもあります。子どもは連鎖反応をおこすので、放っておくと次々泣き出して大変なことになるのです。また、眠っている子を起こさないような気遣いも必要です。ところがジイジイは「泣くからと言って一人の子をずっと抱っこしていたら他の子はどうなるんだい。気に入らないね。」とまあこんな具合。

見ていないようでじっと見ているのですね。それも監視に近い見方です。

いいの、いいの。ここは教育機関じゃないのよ。病気の子なの。その子の要求に応じて甘やかしてやって。このように私はどうしても息子の味方をしてしまいます。

子どもは抱っこされていると安心するのです。月齢によってはずーと抱っこも仕方ありません。そのことはジイジイも分かっているはずなのに、なぜかプラス評価ができないのです。

食事の前、午睡の前等におもちゃの片付けができてない！（少々散らかっていてもいいのに）業務日誌の記入が不十分！（ジイジイがやるからでしょ。任せたらやらなきゃいいのよ）

こんな感じで、自分の保育能力が落ちていることを自覚しながらも、若者のすることがいちいち気に入らない。これ、年寄根性ですよ。実をいうと、息子は息子で、ジイジイの仕事を取ってしまっただけで、はいけないと気を遣っていたのです。

すべてやらないで残しておく。ところが、几帳面すぎるジイジイはそれを「いい加減さ」と受け止めてしまったのです。自分たちが築いて来たものを、大事にしてきた理念をきちんと引き継いでほしいという強い思いと、自分の居場所が取られてしまうという淋しさとやっかみが同時に共存していて「いい加減さ」が許せないジイジイなのでした。

ある日、お客さんの前で大声で怒鳴りつけるという事態が発生！あつ、これはもう限界だ。そう感じた私は、どうしたものか、この硬直状態をほぐすには、なんとか流れを変えなくてはという思いに至りました。

居場所が大事！

「そうだ、ジイジイには居場所があるじゃないか！」ジイジイは週二回、施設などに歌の出前ボランティアに行っていました。歌が大好きなのですから、そちらの方にもっと力を入れてもらえばいいのではないかと。そのことを提案すると、「えっ？いいの？そんな我儘させてもらっても」と意外な表情。「NPO 法人はお金がないから、実は事務局も大変らしい。」

そうして事務局のお手伝いも始めたところ、大変重宝されて、居心地がいいらしく、喜々として通っています。自らを隙間ちゃんと命名。折込作業やら封筒貼り、イベントの椅子並べから受付まで、スタッフの仕事の隙間を埋めてあげるから、隙間ちゃん！！隙間ちゃんは全くの好々爺になりました。そして嬉しいことに、「外ばかりじゃなく、家でも隙間ちゃんしなくてはね。」と茶碗洗い、ゴミだし、生協の搬入、食品の整理、等々、雑用を喜んでしてくれるようになりました。

一方、息子は朝7時過ぎから最終の19時まで保育をしながら、室内の掃除、各種書類の整理、関係機関への報告、会計など一人頑張ってくれています。頼もしい限りの仕事ぶりです。